

巻頭言

巨大リスクにどう立ち向かうのか —現実を見続ける意志と構想力をもとう

●
畠山 武道

キャス・サンスティーン『最悪のシナリオ—巨大リスクにどこまで備えるのか』（みすず書房）は、人々のリスクや大災害に対する反応が、いかに非合理で、情緒的なものとなりうるのかを、詳しく述べている。たとえば、人々は、自己の経験、目にみえるリスク、派手な報道などに強く影響され、地理的・時間的に近い災害に反応し、事故がおきる可能性（確率）には関心をもたない、などである。

サンスティーンの指摘には、賛成できる点が、多々ある。たとえば、だれもが史上最悪の事件と認める東日本大震災と福島原発爆発事件を考えてみよう。

毎日毎日、津波が町をのみつくす映像や、水素爆発で原発建屋が吹き飛ばされる映像を見せられ、人々は仰天してしまった（私も3月13日早朝、羽田空港に駆けつけ、いち早く帰道した）。しかし、民主党政権がぶざまに崩壊し、自民党政権が復活すると、世間は景気回復一色である。これまで以上に大胆に（派手に）お札をばらまき、インフレを起こすのだという。公共事業はすべて大歓迎、建設会社は嬉しい悲鳴をあげている。復興、まちづくり、大災害対策など、地味な話題に対する人やメディアの関心は激減してしまった。これは、単に熱しやすく冷めやすい国民性というよりは、むしろ無責任性というべきであろう。被災者・避難者のみなさんの「忘れられるのがもっとも怖い」という気持ちが分かる。

では、大災害に対する人や政治家の無責任さを、どのように乗り越えるのか。サンスティーンを含め、アメリカの学者が強く主張するのがリスク管理と費用便益分析である。しかし、本当に科学者や経済学者がコンピュータで複雑な計算をすれば、感情に流されない、公正中立で適切な政策が提言できるのか。リスク管理や費用便益分析に対する反対論者の批判はきわめて強い。たとえば、費用便益分析の旗振り役ジョン・D・グラハムは、プッシュ政権のもとで政府の規制審査機関である情報・規制分析室の室長に就任し（2001～2006年）、環境保護のための規制案にノー出しを連発したために、科学者、医師、公衆衛生専門家、環境保護団体などの猛反発をかっした。サンスティーンも同室長に3年（2009～2012年）在籍したが、環境規制の強化に反対し続け、「最も強力な企業の味方」と評された。

日本にも強い支持者がいるリスク管理や費用便益分析は、公正でも中立でもなかったのである。

では、わたしたち自身が、無責任な政治や世論を乗り越える方法はないのか。第1の方法は、現場を見ることである。もし、人が目の前の事象に捕らわれるのであれば、私たちは現場や現実をたえず見続け、重大な事実を忘れないようにするしかない。第2に、しかし、より重要なことは、事実の背後にあるもの、見えないものを見ることであろう。ここでは見えない人に対する配慮（思いやり）や想像力が重要な役割をはたす。

日本の原発は、すでに世界中の人に脅威をあたえ続けているが、将来世代にとっても脅威ではないのか。アメリカの著名な学者の中には、将来、核廃棄物から素晴らしい発見がされ、将来世代から感謝される可能性もあるなどと主張する者もいる。しかし、現在世代にとって脅威であるものは、将来世代にとっても脅威であると考えるのが、最低限の出発点であろう。

目には見えない他国の人々への配慮、将来世代への配慮をたえず心に刻むことが必要である。